平成２２年（２０１０年）２月２３日
第２２６回『２１世紀塾』参考資料
（第２４回提言）

地方の生き残り策は「自前のエネルギー創出」から

『２１世紀塾』代表世話人　小野　徹

【問題提起】

景気低迷の打開策が模索されているが、地方に金が回らない、お金を寄こさないという政策は、地方の首をしめ、ひいては日本全体を疲弊させてしまうだろう。

今、こうしている間にも、地方では過疎がどんどん進んで、田舎には荒れ果てた田畑や、山や、広い空ばかりが残され、心までが「空（くう）」になっている。

そんな絶体絶命の苦境の中で、座して死を待つのではなく、金がないながらも、地方の自活・自立を図るために、何かしらの打開策を探らなければならないが、せめて地方は、近代文明を支えてきた石油に代わるエネルギーを、自前で創出すべきだ。

幸い地方には、－－ガラ空きの空！や、山！、があるではないか。

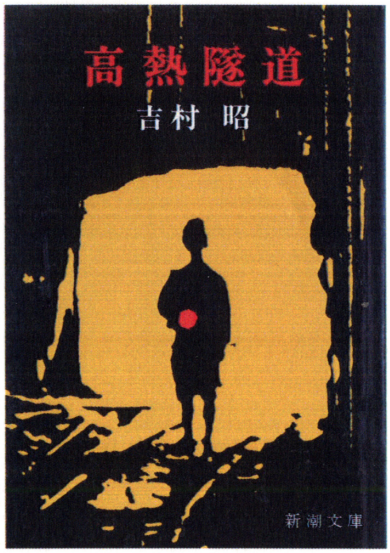
それを利用して、地方は、文明の基本であるエネルギーを自前で創出すべきだ。

◇　　◇　　◇

鳩山総理は、環境先進国のリーダーとして、日本のＣＯ２排出量を、２０２０年には、対１９９０年比で２５％削減することを国際公約にしたいとしているが、ＣＯ２削減や、代替エネルギーの創出に対する具体策は何も示されていない。

経済界は、はなから「とても無理だ」と言っているし、できない分は発展途上国からの「排出権取引」で達成する。つまり、その国に金をくれてやるのでは、あまりにも無策で、無責任だ。

そもそも、ＣＯ２削減どころか、中国やインドの急成長・急発展ぶりをみれば、石油需要は天井知ら



戦時下の電力増強の為、人跡未踏の黒部峡谷で想像を絶する隧道工事が強行された

ずで、いずれ原油価格は暴騰し、そのうち必ず「エネルギー争奪戦争」になるのは必定だ。

現に、中国は帰属問題の解決していない尖閣列島で、我が国の「友愛総理」をあざ笑うかのように、強引に原油採掘を進めている。

産油国の米国ですら、はるか昔から風力発電が行われている

そうした原油の需給事情を先読みをすれば、日本でも、話題の八ツ場ダムなどは、「建設中止」どころか、いずれは「何としても造る」に変わっていくだろう。

観光資源である「人魚像」の真後ろにある風力発電施設

かって、戦時中、軍需工場の電力不足の解消のため、計画はあったものの、工事のあまりの無謀さで、一旦中止となっていた黒部第３ダム！（第４ではない）の建設に、大慌てで取りかかった例もあるのだ。

また、かって『三建だより』の「ＴＥＬＥＸ」にも書いたが、すでに平成９年！にはサンフランシスコ郊外のオークランドでは、風力発電用の風車が１万基も設置されていたのだし、平成１４年！のデンマークのコペンハーゲンでは、一大観光名所となっている「人魚像」の真後ろ！に、脱石油・脱原発の旗印として海上風力発電施設が稼働していたのだ。

近頃は、電気自動車が脚光を浴びていて、いかにも脱石油で動くような錯覚を与えているが、大本の電気は、反対の多い原発や、火力発電によって作られた電気だということを忘れてはならない。

そうしたことから、我が国でも、特に過疎に悩み、財源に乏しい田舎としては、東京や中央官庁に頼ることなく、将来の地域の自立を目指す為には、せめて自前でエネルギーを創出しなければならないが、「智恵子は東京に空が無いといふ－－智恵子抄」の昔から、東京にはビルやスモッグでたいした空はないが、逆に田舎には、空も、山も、海もあるのだから、エネルギーの自給は十分に可能だ。

例えば、太陽光・水力・バイオマス・風力・地熱・海水の温度差等々、数え上げればきりがない。

別に、大々的なものでなくてもいい。離ればなれになっていて非効率な田舎を

自立させるためだから、何も大規模なものでなくてもいい。それぞれの集落を潤わす程度の小さなものでもいいのだ。

――公民館や、廃校といった公共施設にソーラー設備をする。

――耕作放棄の田んぼにソーラーパネルを並べる。

――小さな水力発電施設をどんどん作る。

――荒れ放題の山の間伐材を切って、バイオマスとしての熱電源にする。

――トウモロコシや、ジャガイモや、サツマイモからエタノールを取ってもいいし、まだ実用化されていないが、ススキや、葛や、セイタカアワダチソウといった草のセルロースからエタノールを取ることも可能だ。

加えて、

――田舎で頑張っている中小企業のビルのソーラー・風力施設には、多少の補助をする。

――余剰電力があれば、工場を誘致して、無料で使わせる。

――「環境改善」も、ソーラーエネルギー等を武器にすれば、かつての美しい田舎の風景を取り戻すことができる。

――また、そうした施設であれば、観光の目玉として、見せ場にすることもできる。

そういう意味では、静岡県の伊豆は恵まれているし、幸い静岡県では、川勝知事が伊豆を、「ジオパーク＝大地の遺産（貴重な地形や地層のある自然公園）」として地域振興するとの意向を表明されている。

長崎県島原半島の雲仙普賢岳を中心としたジオパークの学習施設「がまだすドーム」

要は、伊豆という風光明美な田舎の、地上や地下に満ち溢れたエネルギーや、隠されたエネルギー源を探し、活用すれば、かなりのことはできるのだ。

◇　　◇　　◇

担い手である住民は、現にそこに住んでいるのだから、地域の熱意さえあれば、そんなに難しいことはない。

――地方の生き残り策は、「自前のエネルギー創出」からだ。

どんどん進む過疎との戦いで、時間は余りないが、――まだ間に合う。